

かぐらおが

第 17 号

昭和53年12月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



屋外運動場体育管理施設合宿研修所

内 容

北アルプスでの教訓……………安孫子 保… 2	合宿研修所の使用について…………… 6
焼け跡派風外国語のすすめ……………保坂 明郎… 3	植樹実施…………… 7
旭川医科大学談話会…………… 4	研究室紹介……………久津見晴彦… 7
Caポンプの分子機構……………金沢 徹… 4	冥福を祈り追悼法要…………… 8
心筋梗塞と麻酔……………劔物 修… 5	「ねずみ講」「マルチ商法」に注意を！…………… 8
声帯振動制御と設定位置—超音波パルス法による定量的観察—…林崎 勝武… 5	窓 外……………並木 正義… 8



北アルプスでの教訓

安孫子 保

今年の夏はとくにむし暑い。今から21年前の夏もこんなにむし暑かったことを私はふと思い出した。そして忘れようとしても忘れられない北アルプスでの経験がその暑さとともに生き生きとして私の脳裡によみがえってきた。

時は昭和32年の夏である。私は東京・築地にある聖ルカ国際病院でインターン生として修業中であった。夏休みの間に同じインターン生の早坂君（現在仙台市で精神科を開業）と北アルプスを縦走しようということになった。彼は山のことをよく知っているベテランだが、私も旭岳をはじめとする北海道の山には経験があったので多少の自信はもっていた。

登山者で賑う上高地で一泊し、梓川をさかのぼって湖沢小屋に着き、また一泊した。湖沢は高地にあるのでかなり涼しく、すばらしい自然の景観にしばし心を奪われたものである。翌日はいよいよ穂高岳に登り三千メートル級の山の壮大さと美しい自然をみて、苦勞して登ってきた甲斐があったと感じた。空気中の酸素が薄くなったように感じたのも三千メートル級の山だからこそである。夕方から霧がかかってきたが、日の暮れる前に穂高岳の山小屋にたどりついた。次の朝の日の出がすばしかったことは今でもよく覚えている。そういえばサンフランシスコへ向う機上でみた日の出によく以ていた。事件はこの日におこった。穂高岳から槍ヶ岳への道には難所があるが、これらの難所を無事通りすぎてほっとしたためであろうか、何でもない平坦なところで我々は道を見失った。山の道はしばしばわかりにくい、ところどころに石が積み重ねておかれているのでこれが本道だとわかる。いつのまにか石がみえなくなったのである。そこで私は本道を見つめるべく附近を歩いた。すぐ向う側は千丈の谷になっていたが、この附近を歩くのには何の危険も感じなかった。少しでも高いところからみた方が本道を見つけやすいと思って谷のそばにある大きな岩に乗った。ところがである。私とその岩に体重をかけたとたん岩が割れてその半分が谷底へと音をたてて落ちて行くのではないかと。心臓がとまるのではないかと思った次の瞬間には私の足の下にあった岩も谷底へとくずれ、気がついた時には両手の指だけが附近にあった別の岩にかかっており、両足は千丈の谷に向かって宙に浮いていたのである。目の前は真暗になり、そこへ母の姿がみえ、私は犬死することの申しわけなきで一ぱいであった（こういう時は恋人の姿は出てこないものである）。そのうちに早坂君が助けにきてくれた。彼は自らの危険をも

かえりみず私に手をさしだしてくれ、ひっぱりあげてくれたのである。この時ほど生きていることよるこびと友情の有難さを感じたことはなかった。穂高の岩は風化していて危険だということは知っていたが、本道を歩いていた時には全くそのような岩をみなかったのでつうっかり本道以外にある岩に乗ってしまったのである。

この事件があつて以来、私の人生観に大きな変化がおこった。つまり私は一度は死んだので、今の自分は余分に生を与えられていると思うようになった。いつ死んでも別に不思議ではないから思いきって自分の将来を考え、仕事をするのが一番大切であると思い始めた。それまでは試験に落ちないように勉強し、親が年をとっても困らないように自分の将来を考えるのが一番良いと考えていたが、自分の生をもっと真剣に考え、それに向っておそれずに進むということが自分にとってどれほど大切であるかを悟った。そこで周囲の状況が許す限り自分は好きな道を歩こうと決心したのである。人間、こうなるも人生が楽しくなるものである。また何でもできるものである。学園紛争がおこった時に、学生や教官に遠慮することなしに自分の考えを述べるのができたのはこのためである。この発言のために大学をやめるようになったとしても悔は残らなかった。旭川に来るとい話がきまった時にもこの気持ちに変わりはなく、おかげで私は楽しく教室作りをすることができた。旭川医大ほど仕事のやりやすい大学は他にはないと私は信じている。つまり自分自身と現在を大切にすることがいかに生活を楽しくし、仕事に対するエネルギーをつくり出すものであるかを教えられたのである。北アルプスでの経験は私にとってはまことに尊い教訓であった。しかしこの体験を二度と味わいたいとは思わない。山から学ぶべきものは私はもう学んでしまったと思っている。友人早坂君と北アルプスにもう一度感謝したい。

（薬理学講座 教授）





焼け跡派風 外国語のすすめ

保坂明郎

戦争中は敵性語だとの理由で英語が禁止されていたことは学生諸君も周知のことと思う。旧制中学で英語を習ったのは私より2年下までのクラスだったと記憶している。しかしあの時代でも入試に英語を課した所があることは余り知られていないだろう。何とそれは海軍経理学校の試験で、その一部には有名な英国詩人の詩の一節も含まれていたのである。これは私自身の受験経験なので、間違いない事実である（もし合格していたら、今日の私は存在しなかった可能性が強いが……これは余談）。さすがにこの時代、陸軍はもちろん海軍兵学校でも入試科目から英語がはずされていたが、海軍経理学校では視野を広くせよということで、社交ダンスも正課の中に入っていたそうである。

私達も医科ではドイツ語を習った。医学は明治時代からドイツ語が主流で、しかも味方の国の言葉であったからに違いない。しかし敗戦とともに現実のアメリカ語が滔々として入って来て、何時の間にか2年間のドイツ語は私の脳の片すみに追いやられてしまった。元来私は英語と縁が深い。戦死した次兄が英語学専門であったから、小学校の時から強制的に教えられた。兄といっても12才も年長であるから、家庭教師などという生易しいものではなく、出来が悪ければ忽ち拳固が飛んで来るという、しごかれぶりであった。そのお陰で中学に入った時は大変楽だったし、英語の先生に可愛がられ、そうなるとうまます面白くなって成績も向上するという具合であった。

さて暗い予想通りに戦争に負け、男は皆殺しにされるのではないかということも杞憂にすぎないことがわかると、相変らず空腹を抱えながらも前途の明るさというのは、これはすごいもので一寸説明出来ないくらいであった。生命が助かったというより、新しい生命を授けられたという感じで、医学以外にも何かやってやろうという意欲十分で、変な組み合わせではあるが、英会話クラブと謡曲同好会を創設したのは昭和21年の秋であった。謡曲同好会の方は私より3才年下の（今や斯界の重鎮）若手のバリバリが、乏しい謝礼を物ともせず厳しく指導してくれたので会員20人を越える隆盛ぶりであった。ところが英会話の方はどうも適当な指導者がいなくて先細り状態になって来た。そんな時、加藤勝治先生という救世主が現れた。医学英和辞典のあの加藤先生である。当時お幾つぐらいだったか（今の私より若かったに違いないが）、でっぴりとしていながらスマートで、鼻下に貯えられた半白のひげが魅力的であった。東京医大の血液

学の教授をされていたが、在米20年の経験を生かして医学生英語会というのを作るから入会しないかとの報が学生課からもたらされた。私達が小躍りしてこれに参加したことは言うまでもない。人数に制限があって、東京ならびに周辺の医学部（医科大学）の学生1校について2人程度とのことなので、20数人が毎週1回、医科歯科の小教室に集まった。当時東京にはアメリカの軍医はもちろん、軍属である医師も大勢居たから、加藤先生の呼びかけで必ず1人は講師として来てくれた。先ずその人のテーマを話題にして1時間の話があり、次いで加藤先生が内容を簡明に総括したあと、質問・討論に入る。私達の医学的知識の不足から来る幼稚な質問もあるし、時には研究内容に立ち入った鋭い討論もあった。加藤先生は学生と講師、あるいは学生同志の会話のやりとりを聞いていらっしやあって、内容の誤りだけでなく、発音やイントネーションが悪いと、ストップをかけて、細かく訂正されるという風であった。1回およそ2時間で、間違っただけで日本語が飛び出したら10円（今の200円ぐらいの感じか）の罰金で、これは会終了後の、別な愉しみとなったお茶の境界線でのお茶代の一部として積み立てられた。

この会は約3年間続き、私達が医師免許をとると、お互いに多忙になったせいか退会者が続出し、自然消滅してしまった。大学院時代にはドイツ語を復習し、フランス語も1年ほど勉強したが、既に頭が硬くなっていたのか、どうも物にならなかったのは残念である。もちろん教授の指導下にはではあるが、一期生として新しい眼科学教室作りに懸命となり、一方には家庭の事情もあって、私が留学のチャンスを与えられたのは、あの英語会から20年後のことである。カセット英語で短期間の特訓をやって、恐る恐る外国に行ってみると、私の英語でも予想外に通じるので、気をよくして各大学を廻っている内に何となく昔の勤が戻って来て、大学の研究者と話をしている限りはほとんどその内容を誤りなく理解出来た。ところが夕食に招待されたりして家族の人達や医学以外の領域の人々と話をすると、これはもう私の英語では全く役に立たないことを悟った。一般的な語彙の不足と西欧文化の知識不十分のためなのである。それ以後は私もずるくなって、日本の歴史特に文化史をみっちり勉強し、それに必要な語彙だけは用意して、相手を自分のペースに引きこんでしまうことにした。能と歌舞伎の比較論などを喋っていれば、たっぷり1時間の会話は稼げるのである。

眼科学の教師らしからぬことを書いて、お叱りを受けようである。しかし有能な若い医師達の中に、外国語が話せないということだけのために留学のチャンスを失ったり、国際的に伸びられない人が居るのを見るにつけて残念でならない。私達の時代とは違って、機会の多い今

目、出来れば2か国、少なくとも1か国の外国語を学生のうちに（医師になったら心身ともに忙しいのです！）マスターしておくことは全く議論の余地のないように私には思われる。

（眼科学講座 教授）

旭川医科大学談話会

本学談話会は、本学教官の専門分野における研究発表を通して、教官、学生及び関係機関の交流を深めることを目的に、去る昭和49年1月に発足し、本年9月6日（水）・10月18日（水）にはそれぞれ第36回・37回談話会が行なわれました。本号では第36回談話会及び第37回談話会の耳鼻咽喉科学講座林崎勝武講師担当分の内容を紹介します。

（学生課）

■第36回談話会 昭和53年9月6日開催■

Caポンプの分子機構

金 沢 徹

Ca^{2+} は筋収縮やホルモン分泌など多くの生理機能を調節制御する細胞内メッセンジャーとして近年その重要性がますます注目されている。細胞膜や細胞内膜系による Ca^{2+} 輸送のメカニズムを明らかにすることは、細胞の生理機能の基本的理解に必要であるのみならず、さまざまな疾病の成因や病態を理解する上でも重要であると思われる。

細胞内に遊離の状態 で存在する Ca^{2+} の濃度は一般に他の生理的イオンに比して著しく低く $10^{-8} \sim 10^{-6} \text{M}$ である。このため細胞内 Ca^{2+} の絶対量のわずかな変動が容易に $10 \sim 100$ 倍の Ca^{2+} 濃度の変化をもたらす、その結果大きな制御効果が得られることになる。したがって、細胞内 Ca^{2+} の濃度を低くおさえることは Ca^{2+} の制御作用の上で重要な意味をもっている。他方、細胞外液の Ca^{2+} 濃度は細胞内 Ca^{2+} 濃度よりはるかに高く、 10^{-3}M のレベルである。したがって、細胞内外には細胞膜を介して大きな Ca^{2+} の濃度勾配が存在することになり、その結果 Ca^{2+} は受動的に細胞外から細胞内へ絶えず流入する。このようにして細胞内に流れこんだ Ca^{2+} は、再び細胞外へ汲み出されなければならないが、この Ca^{2+} の汲み出しは濃度の勾配に逆らったエネルギーを必要とする能動輸送である。このような能動輸送を行なうCaポンプは広く多くの細胞に存在すると考えられるが、その性質の比較的良好に知られているものは赤血球膜のCaポンプである。しかし赤血球膜を含めて一般に細胞膜に存在するCaポンプの量はきわめて少なく、実験材料としてあまり適当でない。これに対して筋繊維内で筋肉の収縮弛緩を制御して

いる筋小胞体は Ca^{2+} 輸送をほとんど唯一の生理機能とする膜系で、Caポンプの存在量は驚くほど高く、全膜タンパク質の約70%に達する。したがってCaポンプの研究材料としては最も適しているものである。現在我々の研究室も含めて多くの人が筋小胞体を用いてCaポンプの研究を行なっている。以下、これまで明らかにされてきたこのポンプの分子機構の概略を述べることにしよう。

筋小胞体のCaポンプの実体は筋小胞体膜に存在する特異的なATP加水分解酵素である。この酵素の分子量は約10万で1本のポリペプチド鎖からなる球状タンパク質であって筋小胞体膜に外側表面から内側表面までつき抜けるように埋め込まれており、その形状は実際に電子顕微鏡で見ることができる。この酵素タンパク質はリン脂質と結合した状態でのみポンプとして働くことができる。その機能は外見上全く異なる2つの面をもっている。その第1は酵素としての機能で、ATPの加水分解を触媒し能動輸送に必要な自由エネルギーを取り出す働きをする。第2は Ca^{2+} の担体としての機能で、 Ca^{2+} を筋小胞体膜の外側表面で結合し膜内を通して内側表面まで運ぶ働きである。この一見異なった2つの機能はただ一種類の酵素タンパク質によって行なわれている。このことはCaポンプの分子機構を考える上できわめて重要な意味をもっている。実際CaポンプによるATPの加水分解反応を詳しく調べていくと、上記の2つの機能が実は全く同一の分子過程によっておこることが明らかになる。すなわち、ポンプのタンパク質分子のうち、筋小胞体の外側表面に露出した部位に2個の Ca^{2+} が結合すると、酵素としての触媒機能が活性化されてATPの分解反応が始まり、ATP末端のピロリン酸結合が切断されてADPが遊離する。このとき切り離されたリン酸基は酵素タンパク質に転位して酵素がリン酸化される。この反応に共役して Ca^{2+} は筋小胞体膜の外側から内側へ移動する。ATPによる酵素のリン酸化とこの Ca^{2+} の移動とは緊密に共役していて、両者を分離することはできない。この反応で生じたリン酸化酵素は次のステップで加水分解され無機リン酸を遊離すると共に、もとの酵素が再生される。結局、1分子のATPがADPと無機リン酸に加水分解されると、2個の Ca^{2+} が筋小胞体に取り込まれることになる。上で述べたことから明らかになるように、ATPの加水分解反応と Ca^{2+} の輸送過程とは緊密に共役しているため、ATPの分解反応を反応論的に研究することによってCaポンプの分子機構に関し、多くの知見を得ることができる。現在、Caポンプの分子機構の研究はこのような観点から多くの

人達によって精力的に進められている。しかし、 Ca^{2+} の輸送がポンプタンパク質のどのような構造変化によっておこるかという最も興味ある問題は、その分子機構の詳細が明らかでない現在、まだ解かれていない重要な課題として今後に残されている。

(生化学第二講座 教授)

■第36回談話会 昭和53年9月6日開催■

心筋梗塞と麻酔

劔物 修

近年、平均寿命の伸び、高齢者手術症例の増加と相まって虚血性心疾患の既往を有する患者の麻酔や急性心筋梗塞に対する外科的手術の麻酔を経験する機会が多くなってきている。本稿では1)心筋梗塞患者に対する麻酔管理上の問題点、2)心筋梗塞の外科手術に対する麻酔法の2点につき著者の経験を中心に最近の考え方の一部を紹介する。

1) 心筋梗塞患者に対する麻酔管理上の問題点

手術後の心筋梗塞の発生率は0.2%程度であるが、既往のある場合には6.6%と高くなる。既往のあるものでは54%が術後再梗塞のために死亡している。再梗塞発生の頻度は前回の梗塞が3か月以内のもので37%、4~6か月以内で16%、25か月以上で4%と、前回の梗塞から手術までの期間が長くなれば頻度は減少している。麻酔方法や麻酔薬と再梗塞発生率や死亡率には関係がないが、手術侵襲の程度と手術時間には大いに関係することも知られている。一般に心筋梗塞後2週間以内のものには手術、麻酔は絶対禁忌、緊急手術以外は3か月は控えることが望ましいとされているが、これは梗塞後の心筋の治療過程に基づくものである。梗塞後2週間で壊死組織が吸収されて肉芽組織の産生が開始され、2か月で完全な癒着化が起こり、より強靱な修復にはさらに1か月を要する。前述した統計的数値からすれば梗塞6か月後でも再発率は高頻度であり、手術や麻酔は可能な限り遅らせた方がよいといえるが、心筋梗塞の外科的治療に必要な冠動脈造影や血行再建術にはこの原則は当然あてはまらない。心筋の機能は局所で必要とされる酸素の量と局所に供給される酸素の量のバランスによる訳で、心筋酸素消費量を増加させ酸素供給を阻害する事態が生ずれば、心筋機能の障害として現われる。したがって、どのような麻酔方法、麻酔薬が選択されようとも、冠血流量を阻害しないことと酸素消費量を増加させないことの2点に留意すべきである。術中の持続的心電図監視は必須のものであるが、著者はこのために早期に再梗塞発作を発見し適切な処置により救命し得た貴重な症例を経験している。

2) 心筋梗塞の外科的手術に対する麻酔法

大伏在静脈グラフトによる直接的冠血行再建術(大動脈冠動脈バイパス手術)は虚血心筋、壊死周囲の虚血部位に直接血行の再開が得られるので、心筋梗塞や心原性ショックに対する外科的療法として注目され、本邦においても近年本手術症例の増加がみられている。この手術の麻酔にはモルフィンが最適とされており、著者もこれまでに40例程の経験をもっている。ハローセンなどの吸入麻酔薬は心筋に対して直接的な抑制効果を有するが、モルフィン 5 mg/kg という大量を使用しても心機能を抑制しないばかりか、低心拍出量患者に対しては心機能を改善するし、心筋酸素消費量を増加させないなどの利点をもっている。このためモルフィンはこの種の手術には第一選択となる。モルフィン使用後に血圧上昇をみることがあるが、これは血カテコールアミンの上昇によると考えられている。末梢血管拡張薬や交感神経遮断薬の使用、最近では持続頸頭硬膜外麻酔により対処されている。モルフィンの大量使用では呼吸抑制は必然のことであるが、人工呼吸管理により拮抗できるし、術後もICU、CCUで呼吸管理は継続されるが、この薬物の強力な鎮痛および鎮静効果のために術後管理が容易であることもモルフィン麻酔の長所となる。

心筋梗塞患者に対する麻酔管理を行うためには、心筋梗塞の病態生理、冠血流量と心筋酸素消費量の関係、麻酔薬の循環に及ぼす作用などの基礎的知識のみならず、外科手術の程度、種類、患者の一般状態の把握、カウンターパルゼーションなどの補助循環の適応、不整脈と抗不整脈薬さらには各種の交感神経作動薬などの知識をも充分駆使し、患者管理を行うことが要求される。われわれ麻酔科医はつねに外科医と協力して心筋梗塞患者に対してもより安全な手術、麻酔管理がなされるよう、術前から術後にかけて日夜努力を続けているのである。

(麻酔学講座 助教授)

■第37回談話会 昭和53年10月18日開催■

声帯振動制御と設定位置

—超音波パルス法による定量的観察—

林 崎 勝 武

初めに：声帯振動は、声門を開大したり閉鎖する事によりcontrolされる。そのmechanismは、まず発声準備として左右声帯が中央に寄り、声門が閉鎖され、声門下圧が上昇。一定の圧になると声門が押し広げられる。次いでベルヌーイ効果により声門部が陰圧となり、両側声帯が吸引される事、及び声帯自身の弾性による復元等により、再び声門が閉鎖されるというvan den Bergの考えが一般に認められている。

声帯振動の観察手段として、近年、各種の機械が取り入れられ、high speed camera, electroglottography,

strobe scopy等が考案され、実用化されている。これらの手段によって、声帯振動は声帯遊離縁の粘膜の波状運動が重要な役割を演じ、この部分の軌跡は水平方向への直線的な運動では無く、斜め上外方に向かう楕円であること、又、声帯粘膜の移動性には、いわゆる上唇と下唇の間に位相のズレがあり、声門の閉鎖は下唇から始まる等の報告が見られる。

しかしながら現在用いられているこれらの手段には、定量化が無理なもの、及びdata処理が複雑過ぎて定量化が困難なものがあり、又、発声に際し、非生理的な姿勢を強いる為に、種々の制約を受ける等の欠点があり、コンピューターを導入した定量化の試みが始まったばかりというのが現状である。

今回の実験に用いたUGG装置は、被検者に無理がかからず、自然な発声を記録出来ること、定量化が簡単である等の利点があり、声帯振動の観察手段としての利用価値が高いものと考えられる。

目的： 第一の目的は、起声時の声門面積 (phonation neutral area) を定量的に測定し、声帯振動動態との関係を検討すること、及び起声時の声帯振動patternを見出す事にあり、第二の目的は、声門開大に影響を与える最大の因子である声門下圧を同時記録し、起声時における声門下圧、声門面積、振動周期の、相互関係を見出すことにある。

実験方法及び装置： 被検者は成人男子2名(untrained voice)。千葉大学で開発されたUGG装置を用い、超音波パルス反射法によるUGG (ultrasonoglottogram) curveと、パルス透過法によるcontact area curveをoscilloscopeに同時記録、[te]、[E]、[He]等を繰り返し発声させ、タイミングを合わせてボラロイドで撮影、声門の水平振幅、周波数を計測した。又、第二の目的の為に、口腔及び鼻腔にマスクを装着させ、[E……]の発声時に急激に気流を阻止、開放した際の口腔内圧(相対的声門下圧)を同時記録した。尚、計測に際し、機械の性能、温度、湿度等の影響を考慮し、撮影シリーズ毎にcalibrationを行った。

結果及び考察： ① 声帯振動の立上がりパターンは、先ず比較的大きな周期で開大方向に向かう振動が始まり、次いで小さな周期の振動の後、定常状態に入る。

② 定常状態に入るまでの立上がり時間と、声門面積との関連を見ると、声門面積が増大するにつれて立上がり時間は延長する。換言すれば、振幅の大きな振動では、定常振動までに時間がかかる。

③ 周波数の高い声は、低い声に比べて立上がり時間が短い。

④ 起声時における声門面積と声門下圧の間には正の相関関係がある。つまり、水平方向の振幅が増大するにつれて声門下圧も高くなる。

⑤ 周波数と声門面積との間に、逆相関関係がある。換言すれば、声門面積が狭い振動では、声はhigh pitchとなる。

⑥ 声門下圧と周波数との関係については、特別な法則を見出せなかった。

以上、今回の実験に於いては、補正の複雑さ等の為、予想された結果に程遠いものとなったが、UGG装置を用いた声帯振動動態の観察に大いなる自信を得、又、今後の実験へのone stepとして反省と共に励みとなった。さらに改良を加え、声帯振動制御機構の解明に役立てたいと考える。

(耳鼻咽喉科学講座 講師)

合宿研修所の使用について

去る4月17日から使用を開始した屋外運動場体育管理施設合宿研修所は、10月17日をもって本年度の使用を一応終了しましたが、期限後の使用を含めて、これまで10団体、184名の学生・教職員の利用を見ました。

合宿研修所は、収容定員21名で、ミーティングルーム、洗濯室(乾燥室兼用)、シャワールーム、ベッドルームが設けられており、利用にあたっては、原則として食事は学内の食堂、シャワーは体育館内施設を使用しますが、ガス代を自己負担することにより、合宿研修所内でのシャワーの使用や自炊も可能です。

合宿研修所には、寝具、黒板、長机、椅子の他、洗濯機、乾燥機、掃除機、冷蔵庫、食器等が備えられており、快適な研修を行うことができます。

本年度は、体育系サークルの合宿、競技大会事務局、日帰りの研修等に使用されていますが、延使用日は27日にすぎないため、学生諸君の一層の利用を望みます。

なお使用心得は次のとおりですが、使用期間等気候に影響される事項もあるため、詳細は学生課学生係へお問い合わせください。

また「旭川医科大学屋外運動場体育管理施設合宿研修所使用規程」については、「学生生活のしおり」又は、「かぐらおか」第15号を参照してください。

(学生課)



旭川医科大学屋外運動場体育管理施設合宿研修所
使用心得

(趣旨)

第1 この心得は、旭川医科大学屋外運動場体育管理施設

研究室紹介

■ 寄生虫学講座 ■

久津見晴彦

この教室の仕事は、昨年春まず薬理学教室において実験が終了した犬を預き、その消化管内寄生虫を探索することでスタートした。まもなく北海道の犬にも、人畜共通感染の横川吸虫と糞線虫が発見された。横川吸虫症は日本各地において報告されているもので、鮎、鮒、ウグイなどを中間宿主とする寄生虫の感染による。

東北地方までは詳細な調査が行なわれているが、北海道では稚魚の時代に感染していた鮎とともに、琵琶湖から道南に持込まれたものが知られている。今まで北海道には土着していないというのが定説であったが、これが覆えられた。驚いたことに、旭川が流行の中心地のようで、市外へ遠ざかるにつれて寄生率が下ってゆくことがはっきりした。この寄生虫の発育史は複雑で、中間宿主として貝と魚の2種類を必要とし、その体内で形態を変えながら発育してゆかねばならないが、初期幼虫の感染しているカワニナという貝も、後期幼虫が例外なく付着しているウグイも発見された。この寄生虫がまず犬から検出されたのは、釣人が家に持帰った魚を犬に与えるからであろう。これは2年間の宮本助教授の仕事を要約したものであるが、今までの調査が皆無なのではない。

それらは東京にいながら関係者に送らせた魚の検査結果であり、道南を一寸覗いた程度の調査によって、この広い北海道全般を推定したのが誤りであったことは否定しえない。勿論、北海道の医学部に寄生虫学講座がなかったことも、不完全調査の一因であろう。全国各地の寄生虫分布図は、毎年このようにして書換えられてゆく。ところがまだ問題が一つある。一般に利用される寄生虫症例数は厚生省保健所運営報告だが、民間団体の日本寄生虫予防会の事業年報が質的に秀れている。ところが北海道には支部がないため、横川吸虫症をはじめとする各種寄生虫の実態は把握されておらず、これからぜひ調査をしなければならぬと思われる。半年間は雪に埋れるとはいっても、アニサキス症、裂頭条虫症、包虫症は北海道特有の風土病として解明すべき点が多い。

そうは言うが、寄生虫症は南方に限ると判断される向きもあろう。その通りであって、日本の寄生虫学者は熱帯、発展途上国に援助の手をのべつつある。実際に宮本助教授はアフリカはナイジェリアの医学部で一年間寄生虫学の教鞭をとってきたし、福岡助手は熊に追われつつ道内各地の吸血昆虫アブの生態を専門としてきたから、やがてザイル、コンゴあたりのアブ媒介糸状虫の絶滅に腕を振ることが期待される。研究室では感染による宿主寄生虫適合実験が久津見、福岡で行なわれ、学生大西君が援助してくれる。動物飼育と雑用一切は伝法女史の責任であって、その活躍は特筆に値しよう。

(寄生虫学講座 教授)

設合宿研修所使用規程(以下「使用規程」という。)第9条に基づき、旭川医科大学屋外運動場体育管理施設合宿研修所(以下「研修所」という。)の使用について、必要な事項を定める。

(使用願)

第2 使用規程第4条に定める使用願は、別紙様式とする。

(使用申込みの開始)

第3 研修所の使用申込みは、使用しようとする日の30日前から行うことができる。

(使用許可の順序)

第4 研修所の使用許可は、原則として申込み順によるが、必要に応じて調整することがある。

(経費)

第5 研修所の使用を許可された者は、次に掲げる経費を学生課に納入するものとする。

使用区分	内容	経費
宿泊する場合	シーツ 洗濯代 枕カバー 洗濯代	実費を徴収する
プロパンガスコンロ及びシャワーを使用する場合	プロパンガス充当代	実費を徴収する

(使用上の遵守事項)

第6 研修所を使用する者は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

- 1 消灯時間は午後10時とし、消灯後は静粛にすること。
- 2 起床時間は午前7時とし、起床後は寝具の整理及び洗濯室、ミーティングルーム、ベッドルーム、シャワールームの清掃を行うこと。
- 3 電気器具及びガス器具を持ち込まないこと。
- 4 寝具、食器その他の物品は丁寧に取り扱い、備付け以外の場所へ持ち出さないこと。
- 5 炊事、喫茶、食事の後始末、寝具の整頓、清掃は使用者が行うこと。
- 6 塵芥の廃棄は、指定された場所へ行うこと。

附則

この心得は、昭和53年4月1日から実施する。

植樹実施

9月18日(月)午後5時から、環境整備の一環として大学構内植樹が行なわれました。この日は天候にも恵まれ晴れ渡った秋空の下、本学学生150名及び教職員100名の参加を得てシラカバ・ナナカマド・ポプラ・エゾマツなど960本の苗木が植えられました。今まで緑に乏しく、潤いを欠く印象のあった本学も、この植樹によって美化され、施設面の充実と共に着実に修学環境が整備されています。(学生課)



冥福を祈り追悼法要

9月20日(水)午後2時から、東本願寺旭川別院において解剖体追悼法要が行なわれました。今回の法要では昭和52年9月1日以降昭和53年8月31日までの間に尊い御遺体を本学学生の教育及び学術研究に提供された91体を対象として精霊が供養されました。学長焼香及び追悼の辞のあと、読経の流れの中、御遺族・来賓90名、本学教職員40名及び本学学生110名が次々と焼香し、故人の遺徳を偲び冥福を祈念しました。

(学生課)



「ねずみ講」「マルチ商法」に注意を!

既に掲示で周知していますが、最近、「ねずみ講」「マルチ商法」等の悪質な業者による学生の被害が頻発しています。本学では被害の実例を聞いていませんが、これらに加入することのないよう注意してください。

1 ねずみ講

これは、2人の“後輩”会員を勧誘すると8代目で元金の50倍を受領できると宣伝し広めています。加入者の大部分は出資金を回収できず、社会的に厳しい批判を受けています。このため「ねずみ講全面禁止法」が10月18日に成立し来年4月からは、ねずみ講を運営、勧誘等をした者には罰則が適用されます。

2 マルチ商法

これは、他人を勧誘し、販売組織に加盟させれば謝礼がもらえる、商品の御売価格が安くなる、リポートが増えると信じこませて勧誘する商法ですが、実際には商品が売れず、借りた金の返済に苦しんでいる等被害が相次いでいます。(学生課)

窓外



並木正義

—旭川医大で一番評判のよいひと—

それは電話交換手のひとたちである。交換手は一人ではなく、何人もいるはずであるから、“ひとたち”とすべきであろうが、どのひととも同じように親切で、誠実で、感じがよいので今だに同一人のように思えてならない。それであえて“ひと”とした。

最初のひとが立派だったのであろう。自ら模範を示し、後輩をこれまでに教育し訓練したのでしたら心から敬意を表したい。ともかく本学の交換手は全員立派である。外部のいろいろなひとからもよくほめられる。そのたびに私は嬉しく思う。何人かいれば一人くらいは不親切であったり、その日の感情を言葉の表現にあらわすようなことがあっても不思議ではないのだが、一人としてそういうひとはいないし、これまでただの一度も不快な声を耳にしたことがない。これには感心している。

その大学の第一印象が、最初に接した交換手の応答のしかたによって決まるといった場合も少なくないと思う。それほど交換手は重要な役割をもつ。これと同様に、学内におけるそれぞれの職場の印象が、電話の取次ぎによくするひと(女性が多いが)の応答のしかたによって

左右されることもしばしばある。電話というものは顔が見えないだけに、その言葉使いや態度は一層気をつけなければならない。電話の声を通じて、相手の人柄や、教養の程度、電話をかけているときの表情や態度までもよく読みとれるものである。その日の感情の動きを電話の会話にあらわすようなことは、聞き苦しいし、見苦しい。私はひとが電話をかけるのを見たり聞いたりしていると、その日の心理状態がよくわかる。今日は心が乱れているなど思うときには、仕事など頼まないことにしている。学内のあちこちの電話のやりとりを、それとなく聞いてみると、もう少しおだやかに、やわらかく、親切味をもって話しができないものかと思うことがある。無理してきれいな言葉を用いたところで、冷たい響きをもってはだめだ。言葉は心である。それらは自然に相手の心に伝わるものである。また、お互いに電話のエチケットをもっとわきまえることも必要であろう。一本の電話による感情のシコリが、長く尾を引く場合もあり得るので、顔の見えない言葉には十分慎重でなければならない。

この点、本学の交換手の心構えと具体的な言葉の用い方は見習うべきである。学会などで速くに出かけ、用事があって大学に電話するとき、交換手の声を聞くとほっとする。自宅にかけたような気がする。電話で相手にほっとした気持を起こさせる言葉、言い方こそ最高のものといえよう。

旭川医大で誇るにたる人物はと問われたら、私はまず交換手のひとたちをあげたい。ただ願わくば、この状態が長くいつまでも続いてほしい。

今回は旭川医大で一番評判のわるいものについて書く。

(内科学第三講座 教授)